



二十五世觀世左近記念
觀世能樂堂
令和3年4月18日(日)

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

第四十九回

〈花影会 今後の開催予定〉

— 第47回春[再延期公演] — 発売中
令和3年5月30日(日) 11時開演

能「翁」「鶴亀」武田志房 千歳武田祥照 三番三 山本則重
狂言「大黒連歌」山本東次郎
能「弱法師」佐川勝貴

— 第50回秋 — 本年6月1日発売開始
令和3年10月30日(土) 13時開演

能「花月」武田章志
狂言「佐渡狐」三宅右近
能「砧」武田友志
能「紅葉狩鬼捕」武田志房

— 第51回春 —
令和4年4月17日(日) 13時開演

能「翁」「白鬚」片山九郎右衛門 千歳/ツレ 武田友志 三番三 山本則秀
狂言「福部の神」山本東次郎
能「鷺」武田宗和



公益財団法人
武田太加志記念能楽振興財団
Takashi Takeda memorial nohgaku foundation

解説文章 中野顕正(日本女子大学学術研究員)
表紙写真 「翁」武田友志 / 「弓八幡」武田文志 / 「二人静」松本千俊・武田文志
写真撮影 前島吉裕

番組

【舞台展開】

◆翁附 弓八幡・末広かり

〈おきなつき ゆみやわた・すえひろがり〉

《翁》

① 開演前、幕の奥には翁面を納めた「面箱」を祀る祭壇が設けられ、出演者一同は厳肅な心で身を清めます。

① 面箱を持て面箱持「めんばこもち・狂言方」を先頭に、出演者全員が幕から橋掛りを通して舞台へ進みます。大夫「シテ」が正面で深々と礼をしたのち定座につき、大夫のもとに面箱が安置されると、出演者全員が定座につきます。

② 大夫は総祈願の謡を謡い、国土の長久・人々の安寧を願います。大夫は白い翁面をかけ、天下泰平を祈る謡を高らかに謡つと、莊重厳肅な「翁の舞」を舞います。舞い終えた大夫は、千歳露払いの役である千歳「せんざい・ツレ」が「千歳之舞」を颯爽と舞い、白い翁面の動座に先立つて改めて座を清めます。

③ 三番叟は黒い翁面をかけ、面箱持から鈴を受け取ると、軽快な「鈴之段」を舞います。舞い終えた三番叟は退場し、この神事は終わります。

④ 翁の動座に先立つて改めて座を清めます。

⑤ 三番叟「さんばそう・狂言方」が【揉之段】を力強く舞い、黒い翁面の動座に先立つて改めて座を清めます。

⑥ 三番叟は黒い翁面をかけ、面箱持から鈴を受け取ると、軽快な「鈴之段」を舞います。舞い終えた三番叟は退場し、この神事は終わります。

面箱 野村裕基
三番叟 野村萬斎
千歳 武田崇史

野村太一郎 中村修一

① 開演前、幕の奥には翁面を納めた「面箱」を祀る祭壇が設けられ、出演者一同は厳肅な心で身を清めます。

① 面箱を持て面箱持「めんばこもち・狂言方」を先頭に、出演者全員が幕から橋掛りを通して舞台へ進みます。大夫「シテ」が正面で深々と礼をしたのち定座につき、大夫のもとに面箱が安置されると、出演者全員が定座につきます。

② 大夫は総祈願の謡を謡い、国土の長久・人々の安寧を願います。大夫は白い翁面をかけ、天下泰平を祈る謡を高らかに謡つと、莊重厳肅な「翁の舞」を舞います。舞い終えた大夫は、千歳露払いの役である千歳「せんざい・ツレ」が「千歳之舞」を颯爽と舞い、白い翁面の動座に先立つて改めて座を清めます。

③ 三番叟は黒い翁面をかけ、面箱持から鈴を受け取ると、軽快な「鈴之段」を舞います。舞い終えた三番叟は退場し、この神事は終わります。

④ 翁の動座に先立つて改めて座を清めます。

⑤ 三番叟「さんばそう・狂言方」が【揉之段】を力強く舞い、黒い翁面の動座に先立つて改めて座を清めます。

⑥ 三番叟は黒い翁面をかけ、面箱持から鈴を受け取ると、軽快な「鈴之段」を舞います。舞い終えた三番叟は退場し、この神事は終わります。

① 開演前、幕の奥には翁面を納めた「面箱」を祀る祭壇が設けられ、出演者一同は厳肅な心で身を清めます。

① 面箱を持て面箱持「めんばこもち・狂言方」を先頭に、出演者全員が幕から橋掛りを通して舞台へ進みます。大夫「シテ」が正面で深々と礼をしたのち定座につき、大夫のもとに面箱が安置されると、出演者全員が定座につきます。

② 大夫は総祈願の謡を謡い、国土の長久・人々の安寧を願います。大夫は白い翁面をかけ、天下泰平を祈る謡を高らかに謡つと、莊重厳肅な「翁の舞」を舞います。舞い終えた大夫は、千歳露払いの役である千歳「せんざい・ツレ」が「千歳之舞」を颯爽と舞い、白い翁面の動座に先立つて改めて座を清めます。

③ 三番叟は黒い翁面をかけ、面箱持から鈴を受け取ると、軽快な「鈴之段」を舞います。舞い終えた三番叟は退場し、この神事は終わります。

④ 翁の動座に先立つて改めて座を清めます。

⑤ 三番叟「さんばそう・狂言方」が【揉之段】を力強く舞い、黒い翁面の動座に先立つて改めて座を清めます。

⑥ 三番叟は黒い翁面をかけ、面箱持から鈴を受け取ると、軽快な「鈴之段」を舞います。舞い終えた三番叟は退場し、この神事は終わります。

⑦ 三番叟は黒い翁面をかけ、面箱持から鈴を受け取ると、軽快な「鈴之段」を舞います。舞い終えた三番叟は退場し、この神事は終わります。

⑧ 三番叟は黒い翁面をかけ、面箱持から鈴を受け取ると、軽快な「鈴之段」を舞います。舞い終えた三番叟は退場し、この神事は終わります。

⑨ 三番叟は黒い翁面をかけ、面箱持から鈴を受け取ると、軽快な「鈴之段」を舞います。舞い終えた三番叟は退場し、この神事は終わります。

14:05頃 13:00 翁

弓八幡

武田崇史

武田宗典

梅田善博

野口琢弘

深田博治

安福光雄 大川典良

飯富孔明

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

石田幸雄 觀世芳伸

上田公威 田邊恭資

武田宗和 飯田豪

鶴澤洋太郎 斎藤敦

木月宣行 武田尚浩

坂井音雅 角幸二郎

高野和憲 觀世清和

関根祥丸 岡久広

<p

【本日の能の出演者のご紹介】



武田宗典
たけだ むねのり
「翁・弓八幡／シテ」



武田文志
たけだ ふみゆき
「二人静／シテ」



松木千俊
まつき ちとし
「二人静／ツレ」

本日はご来場賜りまして、誠に有難うございます。祖父が起ち上げ、伯父と従兄たちが引き継いでいた花影会で、まさか私が「翁」を披かせて頂けるとは思っておりませんでした。今回、私の師である観世御宗家に地頭を、当代唯一の人気役者である野村萬斎師に三番叟をお相手頂くという榮誉に恵まれました。より一層身を引き締めて、舞台に臨む所存でございます。「鎮魂」「祈り」「寿福増長」という、能の礎が詰まっている「翁」を勤めさせて頂くことは「道成寺」を披く事とはまた別の意味で、能樂師である証として、長年の願いでもありました。また今回千歳を勤める崇史も、これが披きでございます。このような状況の中、お越し下さったお客様に真っ直ぐな「翁」と「弓八幡」で、瑞々しさと生命力をお届けできるよう、精一杯勤めさせて頂きます。「高覽賜りますよう、何卒宜しくお願ひ申しあげます。

シテ方觀世流準職分。重要無形文化財総合認定保持者。1978年1月20日生。武田宗和の長男。父及び二十六世觀世宗家・觀世清和に師事。2歳11ヶ月で初舞台、10歳で初シテ（主役）、以後「翁」千歳、「石橋」「乱」「道成寺」「望月」等を披く。海外公演多数。2014年アメリカにて、能と現代オペラの二部作競演「Tomoe & Yoshinaka」を企画し、両作品で主演を果たす。2018年よりスコットランドで毎年能楽普及公演を行う（オンラインを含む）。2019年文化庁・東京アート＆ライブ・シティ主催の、能とクラシック音楽のコラボレーション公演「はごろも～銀座の飛翔」において主演。2020年12月に同公演を再演。2017年より GINZA SIX 内の觀世能樂堂にて、年に一度、自身のリサイタル公演「武田宗典之会」を開催している。早稲田大学第一文学部演劇専修卒。一般社団法人觀世会理事。

本日はご来場賜り、誠に有難うございます。私と松木氏にて二人静を初演した十九年前、当然ながら各々に（特に私は大きな）課題を感じ「十年毎に再演を」と約束して、今回が三度目となります。初回を「試演」とするならば、二度目（十年前）は結果を残さねば意味がない「挑戦・勝負」、そして今回は、誠に手前味噌ながら「集大成」という事になろうかと思います。各々に研鑽を積んでいる中で、この度「花影会」にて皆様方にご覧頂けます事は、誠に大きな喜びです。幼少期より芸事上の兄として慕い、時には朝まで能について語り合ってきた十五歳上の千俊さん。今はもう、それぞれの芸道を歩んでおりますが、現在の位置を確かめ合い、また初心に返る意味でも大変重要な意味を持つ十年に一度の舞台です。互いに元気であれば勿論十年後もあるうかと思いますが、この様な情勢下にお越し頂ける皆様への感謝を籠めて、「一時千金」の思いで準備して参りました。束の間のひと時、どうかごゆるりとご高覽賜ります様、お願い申し上げます。

シテ方觀世流準職分。重要無形文化財総合認定保持者。1977年10月19日生。武田志房の次男。父及び二十六世觀世宗家・觀世清和・人間国宝・野村四郎に師事。3歳にて初舞台を踏み、これまで「石橋」「乱」「道成寺」「望月」「安宅」「翁」を披く。近年では「隅田川」「定家」「道成寺赤頭」「屋島弓流」等、多くの大曲に積極的に挑み続けている。海外公演多数。ワーケーションップやプロの後進指導にも力を注ぎ、現在は年間百を超える舞台出演の傍ら、毎月數十名の愛好者を指導している。舞台の外では、経営者から学生まで幅広い層を対象に「能樂に学ぶ人生哲学」の講義を展開するなど、多方面から注目を集めている。人々を魅了する事で「花を掴む（感じる）心」を拡げ続ける、魂の能樂師。「文の会」主宰。公益財団法人武田太加志記念能樂振興財団専務理事。

シテ方觀世流準職分。重要無形文化財総合認定保持者。1962年8月2日生。故・松木福蔵の孫、同千冬の長男。父及び武田志房に師事。1966年福蔵三回忌追善能「仕舞「老松」」にて初舞台。1982年4月武田志房師の元へ内弟子入門、1989年独立。「石橋」「乱」「道成寺」「望月」「安宅」「翁」等を披く。2016年に一般社団法人松の会を設立、代表理事に就任。多岐にわたる普及活動に尽力し、坂城町特命大使（長野県埴科郡坂城町）も務めている。「檀の会」「松能会」「松謳会」を主催。東京藝術大学邦楽科卒業。一般社団法人觀世会理事、公益財団法人武田太加志記念能樂振興財団評議員。

【解説】

◆翁附 弓八幡・末広かり

〈おきなつき ゆみやわた・すえひろがり〉

『翁』

芸能の本質を考えるために重要なキーワードに「祝言性」があります。古今東西の芸能のほとんどは、この世の平和を祈り、来たるべき未来の幸福を願うという性格を、その根底に含み込んでいます。歌を謡い、舞を舞うという非日常的な行為によって、私たちの生きることの世の中を祝福しようとする嘗み。——それこそが、芸能という嘗為のもつ本旨であったのです。

それは、能楽の場合も同様です。現在でこそ、一日の公演で演じられる曲数は二、三曲程度となつてしましましたが、昔はもっと多くの曲を上演するのが通例でした。その際、最も正式な形とされたのが、招福の儀式芸能である《翁》を一日の冒頭に置き、その後に祝言を本旨とする能（「脇能」）、さらにそれに續いて祝言性の高い狂言（「脇狂言」）を続けて上演するという、祝言に始まるプログラム編成の形式でした。室町時代には既にその原型となるものが行われていたようですが、その後、江戸時代を経る中でしきたりの体系が形づくられ、現在に伝承される形へと整理されてゆきました。この、一日の冒頭に《翁》・脇能・脇狂言を一続きの祝言演目として演じる形式は「翁附」と呼ばれ、現在でも極めて格式ある上演形態とされています。本公演では、この翁附の形による祝言の芸をご覧頂きます。

仮面劇である能樂にとって、面は芸に欠かすことのできない、極めて大切な存在です。世界の各地で仮面が神として祀られ、面に宿る靈力に対して人々が畏敬の念を抱いているのと同様、能樂の世界でも面は神聖な存在と見なされ、単なる小道具ではない特別の扱いを受けています。

これら能樂の面の中でも特に神聖視される「翁面」を用い、その靈力を借りることで天下泰平を祈るという儀式演目が《翁》です。《翁》は、演劇としてのストーリーをもつ通常の能とは異なり、翁面を祀るための神事であり、その成立は他の能よりも古く鎌倉時代に遡ります。白黒二つの翁面を御神体とし、そのそれぞれを着用して祝祷の言葉を述べ、舞を舞つて世の平安を祝い願うという、《翁》の神事。本曲は、そうした謡や舞という芸の力によつてこの世界に幸福を呼び込む、祈りと喜びの演目なのです。

脇能『弓八幡』

《弓八幡》は、京都南郊 男山に鎮座する石清水八幡宮を舞台とする能です。同社の祭神・八幡大菩薩は、上古の帝・応神（おうじん）天皇が神として示現された姿。はじめ、現在の大分県にある宇佐神宮に出現された八幡神は、後に平安京を守護すべく、男山の地へと影響されました。能樂の成立した室町時代には、この社は皇室の宗廟として重要視されるとともに、足利将軍家を含む源氏の氏神としても崇敬を集めます。本作が描くのは、その神聖な男山の地で繰り広げられる、神の恵みの物語です。

この応神天皇は、その母・神功（じんぐう）皇后とともに、武勇によつて日本に繁栄をもたらしたと伝えられています。軍神として名高い、八幡の神徳。しかし、そうした「武」による支配は昔のこと。天下泰平の御代となつた今、武器は威儀をあらわす装身具ではあっても、実際にそれを行使する必要はなくなつたのだ——。実用には耐えない桑の弓や蓬の矢、それを袋に納めて神に捧げる老人たち。本作に描かれたのは、そんな「武」が不要になつた時代の訪れを喜ぶ、平和への思いなのでした。

本作のシテ・高良（かわら）神は、『徒然草』に記された仁和寺の法師が石清水へ参詣したが、山麓の摂社を石清水の本体と勘違いし、本宮へ参拝せずに帰つてしまつた〉という挿話で有名な摂社・高良社の祭神。この神は、いにしえ神功皇后の武勇を補佐した神だと伝えられています。その時、皇后の事業を達成へと導くべく、高良神をはじめとする五柱の神々が五人の神楽男となつて御神楽を舞つたことが、石清水の祭礼「初卯神事」の起源。その高良神による御神楽という上古の奇瑞が、今ふたたび、本作の舞台上には繰り返されるのです。神々の昔から変わることなく伝えられる、初卯神事の御神楽。本作に描かれたのは、そんな神の舞が見せる、繰り返される奇蹟の物語なのでした。

脇狂言『末広かり』

主人に「末広がり」の購入を命じられ、騙されて唐傘を買って帰つた太郎冠者。一見、本作の主題は太郎冠者の間抜けな失敗談に見えるかもしれません。しかしそれならば、なぜ太郎冠者ではなく主人がシテ（主役）となつているのでしょうか。実は本作のクライマックは、この後、叱られた太郎冠者が主人の機嫌を直す場面にあります。都で習い覚えてきた囃子物（簡単なメロディーでリズミカルに謡う即興的な歌謡）を、健気に謡う太郎冠者。そのウキウキするような面白さに、主人はすっかり機嫌を直すと、太郎冠者の失態を許し、謡に合わせて踊り戯れるのでした。一度は臍を曲げながらも、謡に誘われて気分よく踊り出した、屈託のない主人の性格。囃子物がもたらす幸福感は作品世界全体を包み込み、円満なフィナーレを迎える——。それこそが、本作が祝言曲たる所以なのです。

リズムに乗せて言葉を発し、機嫌を損ねた相手にすらも働きかける、心を動かす歌謡のちから。能『弓八幡』が舞による祝福の曲ならば、本作は歌謡のちからによつて、謡う行為によつて祝福をもたらす曲だといえましょう。

◆二人静

「歌書よりも軍書に悲し吉野山」——松尾芭蕉の門人・各務（かがみ）支考の詠んだ著名な句です。吉野山といえば、花の名所として古来和歌の世界で詠み継がれ、ひとつめの美意識を代表してきた歌枕。しかしそうした雅びな古典の美にもまして、この地で起つた戦乱の記憶こそが、私たちに深い感傷をもたらすのだ……。この句の存在が示すように、吉野は、悲しみの記憶を伝える土地でもありました。『太平記』に描かれた後醍醐天皇と南朝の人々、上代に大友皇子の難を避けて雌伏の時を過ごした天武天皇、そして本作にも描かれる源義経一行の悲劇。この山には、そんな人々の悲哀の記憶が、幾重にも伝わり留まっています。

本作は、その吉野の山中を舞台に、源義経の愛妾・静御前の悲しみを描いた作品です。平家を滅亡へと追い詰め、源平合戦を終結させた英雄・源義経は、兄頼朝との不和によつて遂には都を追われ、放浪の執心。そんな彷徨える彼女の魂に、思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

やがて頼朝方に捕らえられた静御前は、鎌倉へと送られ、この山をあとにします。しかし本作では、彼女の亡魂が留まつてゐるのはあくまで吉野の地だとされました。安住の地を求めて彷徨いつづけた流謫の記憶や、愛する義経に捨て置かれた時の無念。それは、いにしえこの山を迷い歩いた天武天皇や遊子祚国（さこく）の物語と重なり合ひながら、彼女の心の中で反芻されます。静にとつては、この吉野の地こそ、過去への執心を象徴する場所だったのです。

そんな執心からの救済を願う彼女に、勝手神社の神職は舞を舞うよう告げます。放浪の日々を思い出しつつ、健気に舞を舞う彼女。しかしその中で、彼女の心にある記憶が蘇りました。思えば生前も、私は仇敵頼朝の前で不本意ながらも芸を披露し、愛する義経への想いを謡い舞つたのだ——。その在りし日の哀しみが、死してなお再び繰り返されてしまつた今、彼女はひとつ結論に辿り着きます。「思ひ返せばいにしへも、恋しくもなし」とつぶやく静。それは、過去と向き合い、また向き合うことを強いられた彼女による、自らの人生への総括の言葉だったのです。

【さらに知りたい方のために――主要参考文献】

- ◆『二人静』・伊藤正義「各曲解題」「二人静」（『謡曲集』下、新潮日本古典集成、新潮社、一九八八年）、山中玲子「『二人静』の古態」（『能の演出』若草書房、一九九八年。初出一九九四年）、天野文雄「『弓八幡』成立の時と場」（『世阿弥がいた場所』ペリカン社、二〇〇七年。初出一九九九年）、重田みち「能『弓八幡』再考」（『鍛仙』七一〇、二〇二一年三月）。中本真人「宫廷御神楽芸能史」（新典社、二〇一三年）。
- ◆『末広かり』・北川忠彦「狂言『末広がり』をめぐって」（『愛媛国文研究』二九、一九七九年十一月）。

- ◆『二人静』・伊藤正義「各曲解題」「二人静」（『謡曲集』下、新潮日本古典集成、新潮社、一九八八年）、山中玲子「『二人静』の古態」（『能の演出』若草書房、一九九八年。初出一九九四年）、同「『二人静』一音阿弥の演出・元章の解釈」（『観世』八五一三、二〇一八年三月）。

本稿はJSPS科研費JP20K21697に基づく成果の一部である。

本作では、菜摘女に憑依した静御前の靈「ツレ」と、そこに現れた静御前の亡魂の影「後シテ」とが揃つて舞を舞うという演出が取られ、大きな見せ場となつています。但し、これは作品成立当初からの演出ではなく、当初は菜摘女に憑依した静御前の靈が一人で舞うという、『卒都婆小町』などと類似の形であつたと推測されています。それが